

ハイデルベルク信仰問答より

問 125 第四の願いは、何ですか。

答え 「われらの日用の糧を、今日も与えたまえ」であります。それによって、私たちはあなたがすべてよいものの唯一の源であり、あなたの祝福なしには、私たちの心づかいも働きも、またあなたの賜物も、私たちには何の善をもなしえないために、からだに必要なものをすべて与えてくださいということであります。それゆえ、私たちはあらゆる被造物に信頼を置かず、ただあなたにのみ信頼を置くようにさせてくださいということであります。

〔別訳〕

答え 「我らの日用の糧をきょうも与えたまえ」です。すなわち、わたしたちに肉体的に必要なすべてのものを備えてください、それによって、わたしたちが、あなたこそ良きものすべての唯一の源であられること、また、あなたの祝福なしには、わたしたちの心配りや労働、あなたの賜物でさえも、わたしたちの益にならないことを知り、そうしてわたしたちが、自分の信頼をあらゆる被造物から取り去り、ただあなたの上にのみ置くようにさせてください、ということです。

「われらの日用の糧を、今日も与えたまえ」――

私たちはこの祈りを、どこか「今日の食べ物を与えてください」と願うような感覚で受けとめてきたかもしれません。確かにそれも間違いではないでしょう。けれど、この短い祈りには、はるかに広い意味が込められているのです。

「糧」とは、身体を保つための栄養だけではありません。安心して眠れる場所、心を通わせる人間関係、やりがいを感じられる仕事、ふと心を和ませてくれる風景――そういった、一日を生きるために必要な「すべて」を含んでいます。さらに言えば、「信頼して祈る心」そのものも、実は神から与えられた糧と言えます。自分の努力だけで今日を乗り切っているように感じる日もあるかもしれません。ですが、ほんの少しでも祈ってみようという思いが湧いてきたとしたら、それこそが神の招きであり、今日の糧の一つなのです。

この祈りは、「**今日も**」という一語に支えられています。「明日」や「来週」ではありません。「今日ここで生きること」に集中するようにと、主は私たちを導かれます。将来の不安や過去の後悔に囚われてしまうと、今日を生きることが難しくなってしまいます。だからこそ、主イエスは「明日のことを思い煩うな」と言われたのでしょう。

19 世紀のイギリスの評論家・美術評論家であったジョン・ラスキン氏は、評論のほかに設計製図、水彩画、社会思想家、篤志家として生き、多忙な生活を送っていました。彼の机の上に一つの石が置いてあり、そこには「今日」という文字が綴られていたそうです。それは、「今日とい

う一日を大切に生きよう」「与えられた一日を無駄にはできない」という、彼の自分の心に向けてのメッセージだったと思われます。明日のことを煩うのではなく、今日という日を養ってくださる神様に信頼しよう。これは、どの時代を生きる人にとっても大切な視点ではないでしょうか。

そしてもう一つ——この祈りは「私」ではなく「われら」となっています。自分だけの糧を願うのではなく、共に生きるすべての人に必要な糧が与えられるようにという、連帯の祈りです。飢えている人、孤独に苛まれている人、戦いや病に直面している人のことを思いながら祈るとき、この願いはとても深く優しいものとなります。

日々の糧とは、神の恵みによって「生きることを許されている」という証そのものと言えます。私たちの日々の営みも、何らかの物事へと向かっていく計画も、人生における出会いも——すべては「あなたがそれを今日も与えてくださるならば」という信仰に立っているのです。今日もまた、「日用の糧」を祈り求めながら、与えられた一日を感謝して歩んでまいりましょう。